

文部科学省委託事業（令和3年度～令和4年度）

ICTを活用した障害のある児童生徒等に対する指導の充実

# ICTを活用した 自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究

## 研究報告書

令和5年3月

高知県教育委員会

## はじめに

共生社会の礎となるインクルーシブ教育の推進に向けては、地域の小中学校等における特別支援教育を充実させることが必要です。そのために、特別支援学校はセンター的役割を果たしていくことが求められています。

高知県においては、例えば、中山間地域に多くの小中学校が存在しており、地理的な条件により、特別支援学校からの直接的な支援を受ける回数に限界があり、十分な支援を受けることが難しい場合があります。

この課題を解決するために、特別支援学校が ICT を効果的に活用し、空間的、時間的、物理的な条件に左右されることなく、学校を支援することができるようになると、障害のある子どもたちの主体的な学びを実現し、自立と社会参加に向けた力を身につけさせることにつながると考えました。

そこで、高知県教育委員会では、令和 3 年度から令和 4 年度までの 2 年間、文部科学省委託事業「ICT を活用した障害のある児童生徒等に対する指導の充実（ICT を活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究）」の指定を受け、調査研究に取り組んでまいりました。

本報告書では、研究指定校である高知県立高知江の口特別支援学校（病弱）、高知県立高知若草特別支援学校（肢体不自由）の 2 校が実践してきた、従来からの対面での指導・支援に、ICT を活用した遠隔での指導・支援を組み合わせた、新しい地域支援の取組について紹介しています。

この冊子を参考にいただき、地域の小中学校と特別支援学校が連携を深める 1 つの方法として ICT を活用することで、高知県内のどこに住んでいても特別な支援を必要とする児童生徒が必要な指導・支援を受けることを可能にし、高知県内の特別支援教育の更なる充実につながることを期待しています。

令和 5 年 3 月

高知県教育委員会



## 目 次

1	調査研究の概要	・ ・ ・ ・	1
2	高知江の口特別支援学校（病弱）		
	研究の概要	・ ・ ・ ・	3
	資料1 情報収集シート（学校用）	・ ・ ・ ・	19
	資料2 情報収集シート（保護者用）	・ ・ ・ ・	20
3	高知若草特別支援学校（肢体不自由）		
	研究の概要	・ ・ ・ ・	21
	資料1 相談内容確認シート	・ ・ ・ ・	32
4	まとめ	・ ・ ・ ・	35
	参考文献等	・ ・ ・ ・	38



---

# 1 調査研究の概要

---

## 1 研究の背景

高知県では、新型コロナウイルス感染症による令和2年4月から5月にかけての臨時休業期間中、高知江の口特別支援学校（病弱）が実施している通級による指導（他校通級）や、特別支援教育の専門性向上等を目的とした高知若草特別支援学校（肢体不自由）の地域支援の取組など、県内の県立特別支援学校がセンター的機能として実施してきた多くの取組が中止や延期になった。

このような取組においては、児童生徒の多様な教育的ニーズに応じたきめ細やかな自立活動の指導や小中学校への支援が求められることから、これまでは対面だけで行ってきた経緯がある。今後、対面できない状況にあっても実施できるように、何らかの工夫をし、特別支援学校のセンター的機能を充実させていくことが課題である。

また、本県の県土は東西に長く、地域の小中学校を訪問するには、県立特別支援学校から片道1時間以上の移動が必要な場合がある。従来の対面の取組では、地理的要因から、訪問支援までに時間がかかり支援回数が限られていることも課題になっている。

これらの課題を改善し、児童生徒が学びの場や居住地域に関係なく、適切な時期に特別支援学校の支援が受けられるようにするためには、県立特別支援学校のセンター的機能に、新たに ICT を活用した遠隔による指導・支援を取り入れることが必要である。しかし、通級による指導や地域支援をどのように遠隔で実施し、効果的な指導・支援を実現できるのかについては、参考となる実践事例の蓄積が少なく、具体的な実践事例の共有が求められている。

## 2 研究の目的

本調査研究は、特別支援学校のセンター的な役割として効果的に ICT を活用した自立活動の指導に係る新たな支援方法を開発し、ICT を活用した新しい地域支援の在り方を明らかにすることを目的とする。

## 3 事業概要

本調査研究では、高知江の口特別支援学校の他校通級と高知若草特別支援学校の地域支援の取組を調査研究の対象とした。

研究の観点として、以下3つを設定した。

- ・遠隔でのやりとりを含めた児童生徒の実態把握（障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境など）の在り方について
- ・遠隔による実施を含めた指導・支援（対面と遠隔を組み合わせた指導・支援）及び評価の在り方について
- ・遠隔でのやりとりを含めた連携の在り方について

また、ICT を活用した自立活動の効果的な指導の在り方検討会（以下、検討会）を設置し、学

識経験者2名、行政関係者3名、学校関係者3名の計8名の委員で構成し、年3回、2年間で計6回開催した。

検討会では、研究指定校2校が取組を報告し、この報告を基に質疑及び研究の方向性に関する協議を行い、研究の方法や内容に関する方向性への指導・助言、効果の検証や評価を行った。

調査研究の概要を図1にまとめた。

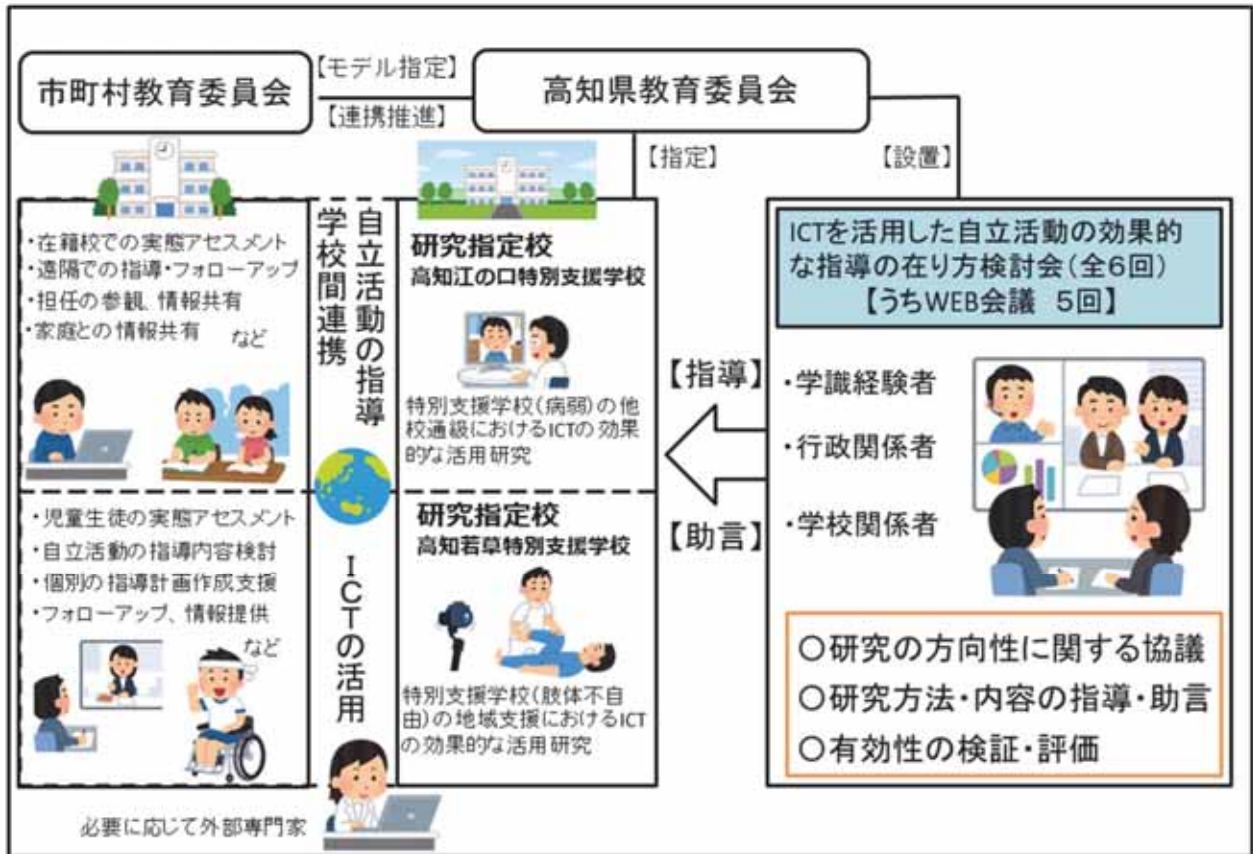


図1 概要図

これらの取組を通して、研究指定校2校は特別支援教育のセンター的機能の充実に向け、地域の小中学校等と連携を図りながら、ICTを活用した遠隔での取組も含めた指導・支援を実践していった。

## 2 高知江の口特別支援学校 (病弱)





# ICT を活用した他校通級の実践

高知江の口特別支援学校

## 1 研究の目的

平成 31 年度から病弱特別支援学校で地域の小学校及び中学校に在籍する病弱・身体虚弱の児童生徒を対象とした通級による指導が開始された。開始から 2 年間、大学と連携し、通級による指導の指導内容や在り方について研究してきた。個別の実態に応じた自立活動の指導が実践され、一定の成果がみられている。しかし、多くの時間を過ごす在籍校や家庭での様子は指導目標設定に必須な情報であるが、在籍する学校を実際に訪問して児童生徒の行動観察をする機会がない。在籍校の学級担任との情報共有は、連絡帳と学期に 1 回の支援会を中心に行っているが、日常的な児童生徒の生活を共通理解することが少ないことが課題となっている。

また、病弱・身体虚弱を対象とした通級による指導を実施している特別支援学校は県内に 1 校だけであり、保護者送迎で通っている児童生徒は、指導回数を増やす必要があっても、保護者の仕事などの都合で増やせないことも課題になっている。

これらの課題を解決するために ICT を活用した情報収集や連携、指導を行うことが効果的であると考え、在籍校及び家庭での児童生徒の実態を遠隔システムで情報収集し、アセスメントを行う「遠隔を用いたアセスメント」、ICT を活用した遠隔の通級による指導を行うことで在籍校と共通認識をもって取り組む「遠隔の通級による指導」、在籍校の学級担任等と通級担当者が、ICT を活用して情報共有を行う「定期的な遠隔支援会及び保護者面談」の 3 つに取り組むことで課題が解決されるのではないかと仮説を立てた。

そこで、本研究では①遠隔システムを用いたアセスメント、②遠隔の通級による指導、③定期的な遠隔支援会及び保護者面談について年間の計画に基づいて実践し、事例研究を行うことで、ICT を活用した遠隔の通級による指導の意義を明らかにする。

## 2 研究内容

### 1. 対象

令和 3 年 4 月から令和 5 年 1 月の期間に高知江の口特別支援学校の通級指導教室に他校から通っている A 中学校の生徒 A、B 中学校の生徒 B、C 小学校の児童 C を対象とした。併せて担任や特別支援教育コーディネーター、対象生徒の保護者、関係機関を対象とした。

以下、生徒 B への取組を中心に取り上げる。

### 2. 年間の流れと研究計画

遠隔を用いたアセスメントは、年度当初の 4 月から 5 月に実態把握のため情報収集シートの記入及び聞き取りを、在籍校の担任や保護者から対面もしくは遠隔システムを活用して行った。収集した情報を基にフェイスシートを作成し、支援会で目標を検討しながら個別の指導計画を作成した。目標と併せて年間の授業計画の検討を在籍校の担任と行い、遠隔の通級による指導の日程調整も行った。

遠隔の通級による指導は、毎月1回から2回実施し、1回の指導では20分から30分取り組んだ。指導の前には打ち合わせを在籍校の担任と行い、評価の観点や気をつける点についての確認を行った。指導後には振り返りの会をもち、画面上からは確認できなかったこと等も含めて在籍校からの報告を基に、今後の指導に向けて検討した。

また、学期の中間と学期末に遠隔による支援会及び保護者面談を行った。その中で、通級による指導の成果が、学校や家庭において般化されているのかについて検討した。

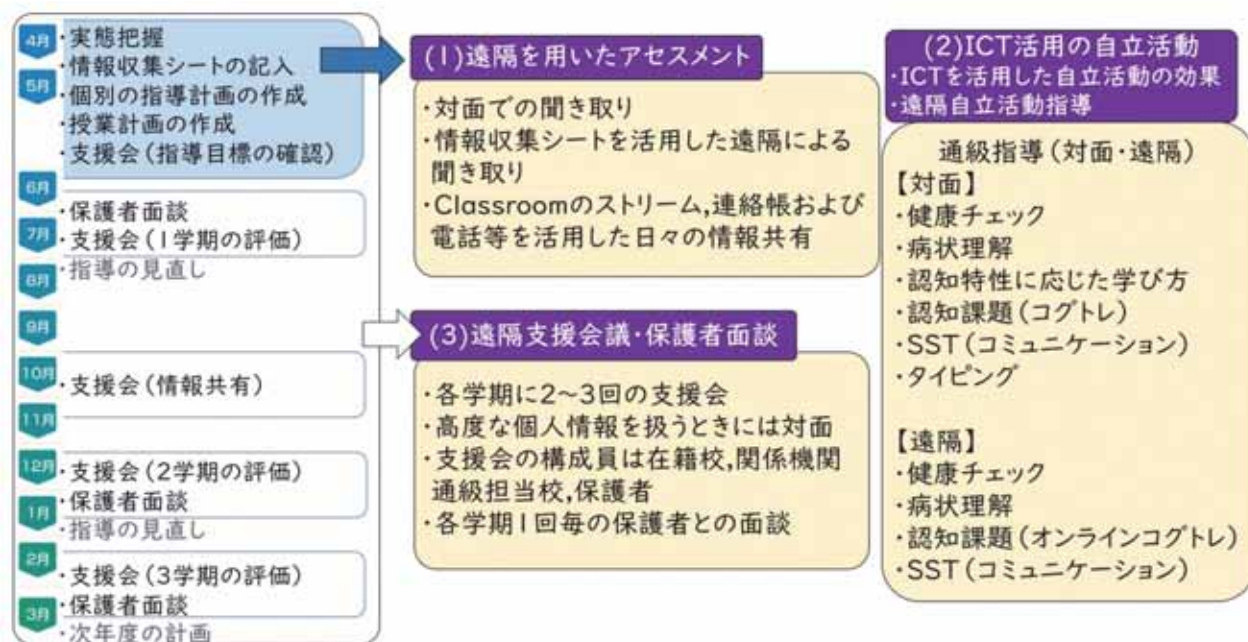


図1 年間の流れと研究計画

### 3. 遠隔を用いたアセスメント

#### (1) 方法

遠隔を用いたアセスメントでは、情報収集を行うため聞き取りの項目は、GoogleForms(以下、Forms)で作成した自作の「情報収集シート(学校関係者用)」(資料1)と「情報収集シート(保護者用)」(資料2)の2種類を用いた。

学校関係者がFormsの情報収集シートに記入した後にGoogleMeet(以下、Meet)を用いて聞き取りを実施した。保護者からは対面での聞き取りやZoomを用いた遠隔の聞き取りを実施した。実態を把握するため年度当初に情報収集シートを用いて「病気の状態」や「生活リズム」、「将来の希望」、「コミュニケーション」、「学力」、「対人関係」等についての情報を収集し、加えて学校や家庭における生活全般の情報や進路についての情報から「フェイスシート」を作成した。

収集した情報を基に「個別の指導計画」を作成した。その際、通級担当者、在籍校の担任、保護者と目標や手立てについて確認を行った。

学校の学習環境や児童生徒の行動面についての情報、支援会や通級指導教室の日程はGoogleClassroom(以下、Classroom)のストリームに投稿し、関係者間で共有した。

#### (2) 遠隔を用いたアセスメントの取組

情報収集シートを活用した生徒Bの在籍校への聞き取りでは、関係者がシートに事前に記入したものを基に、情報収集を行った。学級担任からは授業中の様子や、休み時間の様子、対人関係、

コミュニケーション、学習面についての情報を収集することができた。保護者からは対面による聞き取りを行うことで、病気の状態やコミュニケーション、対人関係についての情報を収集することができた。学習面では、「読んで答えることに時間がかかる。そのうちに寝ることもある」「学習成果は定着していない」「自主学習ノートにまじめに取り組むことができる」という実態が分かり、フェイスシートに記載した。そこから、「まじめに学習に取り組んでいるが、思考に時間がかかり過ぎると寝てしまい、学習の積み上げが難しい。」ことが分かった。そこで指導目標を保護者からの要望や担任との支援会で「自分の病状を理解し、特性に応じた学び方を身に付ける。」とした。また、対人関係やコミュニケーション面においては、情報収集シートから「友達に話しかけるより、大人に話しかけるほうが多い」「自ら積極的に話しかける場面が少ない」という実態と、担任からの聞き取りの中で「聞かれたことに即答することが多く、友達とトラブルになることがある」ということが分かり、フェイスシートに記載した。そこから、「友達とのコミュニケーションでトラブルになることがあるため、自分から友達に話しかけることが少なく、生徒Bの伝えたいことを理解できる大人に対して話しかけている。」ことが分かった。そこで指導目標を保護者からの要望や担任との支援会で「場面や状況に応じた適切なコミュニケーションスキルを獲得する。」とした。情報収集シートを活用したことで、必要な情報のポイントを絞ることができた。しかしながら、質問項目の意図が十分に伝わっておらず、「学習面」の項目で「読み、書き、計算」等の具体的な姿ではなく、「自主学習ノートに真面目に取り組むことができた。」と書かれており、必要な情報を収集できていないことがあった（表1）（表2）。

Classroomのストリームを通じて行った情報共有は、217回行われた（表3）。そのうちの129回（59.4%）は特別支援学校から投稿されたものだった。在籍校からは54回（24.9%）の投稿が行われ、関係機関からは34回（15.7%）だった。各校の内訳を見ていくと、A中学校とC小学校は在籍校よりも関係機関からの投稿が多かった。B中学校は投稿されたことへの返信であり、B中学校からも投稿されていたりすることで、だいたい同じぐらいの投稿数だった。

ストリームの投稿内容は、「学習の記録や生徒の様子について」が121回（55.7%）で、「支援会や遠隔の通級による指導の日程調整」が67回（30.9%）、連絡事項等の「情報伝達」が29回（13.4%）だった（表4）。ストリームの活用方法として児童生徒の通級指導教室や在籍校、関係機関での学習の記録や様子について多く投稿されていることが分かった。各校の内訳を見ていくと、B中学校は日程調整に関する投稿が学習の記録よりも多く、支援会以外に、遠隔の通級による指導の日程調整でも活用しており、ストリームを活用する機会が多かったことが分かった。

Classroomのストリームを通じて行われた情報共有では、「授業の感想などは短いながらも思ったことが表現できるようになってきています。」「4時20分ごろに登校し、算数のプリントを1枚仕上げて帰りました。」「ICT支援員とプログラミングでロボットを動かし、考えながらプログラミングしていました。」等、それぞれの場所においてどのように活動したのか記載することで、活動を共有するだけでなく、取組の成果について把握することができた。また、当初はClassroomのストリームを確認する習慣がなく、返信の投稿を行うまでの期間が長くなり、電話で確認を行うことが多かったが、ストリームを確認する日を定めることと、各校の特別支援教育コーディネーターにも協力していただくことでスムーズな情報共有につながった。

表1 情報収集シート（学校用）※一部抜粋

質問項目	回答
対人関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達との関わりは少ないが、得意な絵を通じて同級生とも関わっている。</li> <li>・友達に話しかけるよりは、教員に話しかけるほうが多いかも知れない。</li> </ul>
学習面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主学習ノートを周囲の人よりも多く頑張っている。</li> <li>・読んで答えることに時間がかかる。そのうちに寝てしまい、さらに時間がかかる。</li> </ul>
学力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年でも学級でも成績は伸びておらず、学習成果は定着していない状況である。</li> </ul>
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話を理解する力もあり、伝える力もある。</li> <li>・クラスの中に気が合う子がいない。</li> <li>・自ら積極的に話しかける場面が少ない。必要最小限の働きかけにとどまっている。</li> </ul>

表2 情報収集シート（保護者用）※一部抜粋

質問項目	回答
病気等の状態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小4で通院するが、治療の成果を感じられず通院を辞めてしまう。症状が悪化したことに伴い、小6から再度通院する。</li> <li>・好きな学習や活動では眠らないが、通常の授業ではほぼ寝てしまう。</li> </ul>
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族との関係は良好である。</li> <li>・小学校時代の友達や共通の趣味がある友達と仲が良い。</li> <li>・他者から嫌われているという思い込みがある。</li> <li>・新しい人間関係を築くことが苦手である。</li> </ul>
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞かれたことに即答することが多く、友達とトラブルになりかけたことがあった。</li> <li>・友達と話すより、教員と話すことの方が多い。</li> </ul>
将来の希望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラストレーター。</li> <li>・料理人。</li> </ul>

表3 ストリームへの投稿回数（回）（全217回）

	特別支援学校	在籍校	関係機関
A 中学校	62(67.4%)	8(8.7%)	22(23.9%)
B 中学校	45(53.6%)	39(46.4%)	利用なし
C 小学校	22(53.6%)	7(17.1%)	12(29.3%)
合計	129(59.4%)	54(24.9%)	34(15.7%)

表4 ストリームへの投稿内容（回）（全217回）

	学習の記録	支援会等の日程調整	情報伝達
A 中学校	63(68.5%)	9(9.8%)	20(21.7%)
B 中学校	28(33.3%)	39(46.4%)	17(20.3%)
C 小学校	30(73.2%)	8(19.5%)	3(7.3%)
合計	121(55.7%)	67(30.9%)	29(13.4%)

## 4. 遠隔の通級による指導

### (1) 対象生徒の実態

生徒 B は睡眠障害の診断があった。WISC-IVの結果は、処理速度は平均だったが、知覚推理に困難さが見られた。S-M 社会生活能力検査第 3 版の結果から「作業」、「自己統制」は年齢相当だったが、「身辺自立」の項目の、「身だしなみに気を付ける」ことや、「集団参加」の項目の、「他者から促されないと慣れていない活動に参加できない」に困難さが見られた。TK 式個別学力アセスメントでは、読みは小学 5 年生、書きは小学 3 年生、計算は小学 2 年生から誤答が見られた。

病歴は、小学 4 年生ごろから家庭や学校で眠気を訴えるようになり、学校では朝登校してランドセルから荷物を出した状態で寝ていることがあり、起こさないと比較的長い時間寝ている状態が続くことがあった。そのため睡眠障害の診断を受けて 1 年間の通院治療を行った。改善が見られなかったため治療を中断したが病状が回復せず、小学 6 年生の 3 学期から通院治療を再開した。

学習場面では、小学校時代は、図工などの好きな学習や活動では眠らずに参加できることもあるが、通常の授業ではノートテイクや課題を行っている際に寝てしまうなど、授業中に寝ている時間が多かった。中学校では、席が隣の同級生が起こしてくれることで覚醒して取り組むことができた。担任は病状への理解があり、寝ていたら起こしていたが、担任以外の教科では対応が異なる場合があった。病状の関係で授業中に眠ってしまうことがあり、学力の定着が十分ではない。そのため学習に対して苦手意識をもっており、「私は勉強ができない」「～になったらどうしよう」とネガティブな思考になり、適切な行動に移ることができない場合がある。字をきれいに書いたり、描画やコラージュ等の作品を作ったりすることが得意であった。

対人関係能力は、幼稚園の頃は友達との関りが少なく、絵を描いて過ごす等の一人遊びが多かったが、小学校では友達との関りがもてるようになり、良好な関係を築けるようになった。その中で、自分の思いをはっきり言うことができるため、友達に対して言いすぎてしまうことがあった。中学校ではクラスや部活動の友達と良好な関係を築いている。しかし、話したい衝動を抑制する力が弱く、場面や状況に関係なく話し始めることがある。中学校では本人が我慢しているためトラブルはなかった。真面目で正義感が強いため、「授業というものは静かに聞くものである」という考えをもっており、授業中にふざける生徒に対して不快に思っていた。

### (2) 指導目標

本生徒の自立活動の目標は、遠隔を用いたアセスメントで収集した情報を基に「自分の病状を理解し、特性に応じた学び方を身につける」「場面や状況に応じた適切なコミュニケーションスキルを獲得する」の 2 つを設定した。具体的な指導内容を設定するために、自立活動の「健康の保持」の「(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること」と「環境の把握」の「(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること」の項目を選定し、関連付けて“病気の状態を理解し、起きて活動できるための手だてを身に付ける。そして睡眠や服薬の生活管理する力を育み、感覚や認知の特性を生かして学習に取り組むことで学力の積み上げができる”と考え、「病気理解」と「特性に応じた学び方」を指導内容とした。また、「人間関係の形成」の「(2) 他者の意図や感情の理解」、「(3) 自己の理解と行動の調整」と「コミュニケーション」の「(5) 状況に応じたコミュニケーション」の項目を選定し、関連付けて“他者の意図や感情を理解し、自己の行動を調整することで周囲の状況を理解し、適切なコミュニケーションをとることができる”と考え、「コミュニケーションスキル獲得のための SST」を指導内容とした。

### (3) 遠隔の通級による指導の方法

在籍する中学校でも学習しやすいように Chromebook を使用し、Classroom を通して教材の配付や提出、Meet を用いた学習を行った。活動の振り返りに Forms を活用し、授業の内容や学習時間について質問を行った。

遠隔システムを活用した通級による指導は、特別支援学校での通級の時間に Meet の操作を練習したのちに、令和3年度に1回、令和4年度に8回実施した。場所は在籍中学校の保健室で放課後に行った。遠隔の通級による指導を実施する前に在籍校の担任と、授業内容と評価の観点について Meet を使って打ち合わせを行った。指導の場面では、生徒が自分の心身の状態を理解するために、指導時間の最初と最後に20段階のスケーリングを行い、その後に課題を行った。指導後には同席した在籍校の教員と振り返りを行い、生徒の様子を確認するとともに、在籍校の中で生徒Bが抱えている課題について協議し、次回の授業の内容についての検討を行った(図2)。学習内容は、生徒Bがしんどさを感じている内容で、遠隔でも取り組むことができ、在籍校の担任と連携しながら取り組んでいきたい「病気理解について」と「コミュニケーション」についてのSSTを行った(表5)。

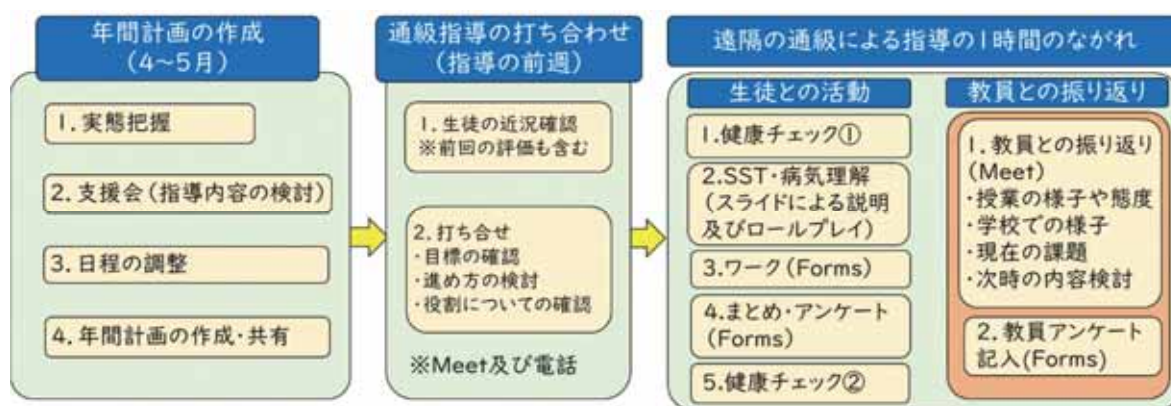


図2 遠隔の通級による指導の流れ

表5 通級指導教室の学習内容

	内容	対面	遠隔
体調と気持ちのスケーリング	体調管理のため、指導の最初と最後に毎回20段階の数直線で本人がチェックを行い、教員と一緒に確認を行う。	○	○
病気理解 (服薬・運動の確認、 症状及び予防法)	一週間単位で作成されたチェックリストの記入を家庭で行い、通級指導の場面で確認をする。また、自分の病気について学習を行い、症状への対応方法や予防法を学ぶ。	○	○
SST	友達とのコミュニケーションや授業中の態度、クラスのルールなど学校で起こりうる場面を想定したワークシートの課題を通して、適切に状況を把握する力と発言する力の育成やリフレーミングに取り組む。	○	○
タイピング	書字の代替手段として学習に活用するために、PCのタイピングソフトを用いて文章入力を行い、タイピングスキルの向上に取り組む。	○	

数学	中学校で取り組んだ内容の復習を題材に、公式や問題の解き方をマーカーで線を引いたり囲ったりして視覚的に強調することで理解を促し、練習問題に取り組む。	○	
漢字	小学校中学年から高学年の漢字を中心にタブレット型端末のアプリを用いてなぞり書きを行い、練習をプリントで行う。そして、学習した漢字を用いて熟語を書く。	○	
認知機能を高める課題	見る力を高めるために「なぞり算」や「点つなぎ」の課題に取り組む。タイムとエラー数を計測し、速く正確に課題が行えたことを実感することで学習意欲を高める。	○	

#### (4) 遠隔の通級による指導の実践

令和3年度は遠隔の通級による指導を1回行った。その時から Google スライドの画面や説明をよく聞いており、発問するとすぐに返答することができた。指導中に眠くなる様子も見られなかった。Forms で課せられるワークについても口頭での説明で実施することができ、回答欄にタイピングで入力することができた。自由記述の問題では、適切な漢字を使って自分の考えを入力して答えることができた。指導実施後のアンケートには、学習内容を理解することができたと回答し、良かった点として「今日の課題について色々取り組めた」と回答した。

指導上の改善点は、スライドを画面共有しているときには、生徒側からは教員の顔が見えないため発問への回答が長くなり、話し続けてしまう場面があったことに対応する方法を準備することであった。また、画面共有のための操作が通級指導担当教員側で時間がかかってしまったので、授業のテンポが悪くならないようにする点である。

生徒と担任からのアンケートでは、生徒は「活動内容は理解できた」、「時間もちょうど良かった」、「音声は十分聞こえた」と評価し、同席した担任は、「通級の様子を知ることができた」と回答した。学校へのアンケートでは、放課後の実施は急な行事が入ることや、部活動がある際には静かな環境の確保が難しいことが指摘された。

令和4年度は1年目の課題を受け、学習内容の精選とともに事前の打ち合わせと、事後の振り返りを行うようにした。そうすることで、通級担当者が見えない場面においても評価の観点に基づいて在籍校の同席している教員が隣から支援を行うことが可能となった。また、振り返りを行うことで様子を確認するとともに、現在の学校での様子について情報共有することができ、在籍校や通級での指導に生かすことができた。当初は Forms の課題で取り組んだことについてロールプレイで適切な発言ができるようにしていたが、自分の意見を相手に伝えることに課題が見られたため、双方向で意見を出し合いながら適切な意見が述べられるように JamBoard を活用した(表6)。JamBoard を活用することで、相手の意見を見て自分の考え方が適切かどうか考えるようになり、自分から修正した意見が述べられるようになってきた。担任と保護者による SST に関する評価では、客観的指標として「ソーシャルスキル尺度 中学生用」(上野・岡田 2006)を使用した。結果は図3に示す。年度当初の数値と比較すると全項目において担任も保護者も高くなっている。学校の評価は、7月と11月で大きな変動が見られるが、担任が変わったためである。保護者は「集団行動」と「仲間関係スキル」が下がっているが、友達と遊びに行くことが1学期と比べて2学期は減っていたことに伴って数値が下がった。病状理解についても、毎回の健康チェッ



クと服薬確認、自分の病気についての学習をスライドで行うことで、病状を理解し、服薬への意識が高まり服薬を忘れることがなくなった。健康チェックでは、その日の日中の活動が影響を及ぼしており、体調が良くない状態で学習に臨むことはあった(図4)。しかし、指導後に行う振り返りのアンケートでは肯定的な回答となっており、通級による指導に期待感をもっていたことが分かった。

表6 遠隔の通級による指導 学習内容

日付	学習内容	指導時間 (分)	Forms	Jam Board	ロール プレイ
6/13	「みんなで決めよう」	25	○		
6/27	「話し合って決めよう」	22	○		○
7/7	「友達と好みが変わったら」	22	○		○
9/14	「後輩に言われても」	24	○		○
10/6	「上手な断り方①」	26	○		○
10/20	「上手な断り方②」 病気理解	35		○	○
11/24	「怒りのエレベーター」 「ルールを守っていない人がいたら」	32	○	○	○
12/14	「いろいろなものの見方・考え方」	35		○	

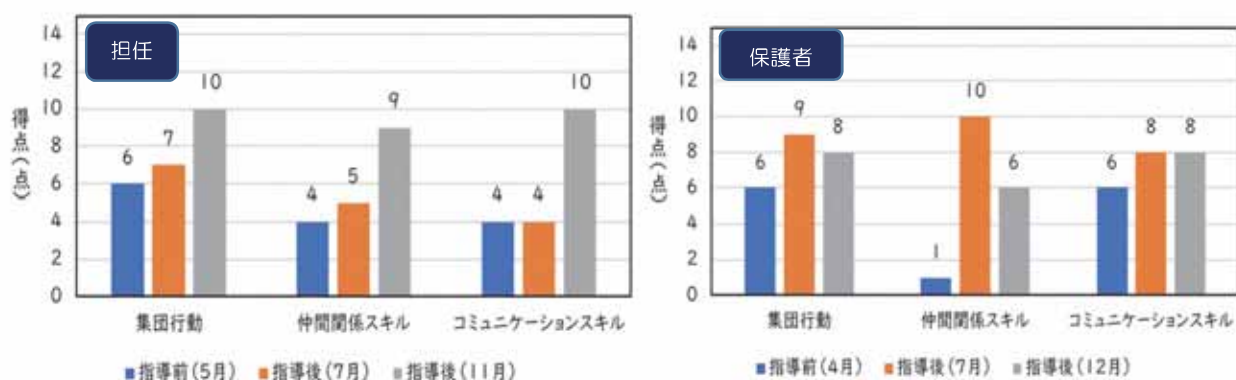


図3 SSTの評価(左:担任、右:保護者)  
(「ソーシャルスキル尺度 中学生用」上野・岡田 2006 を使用)

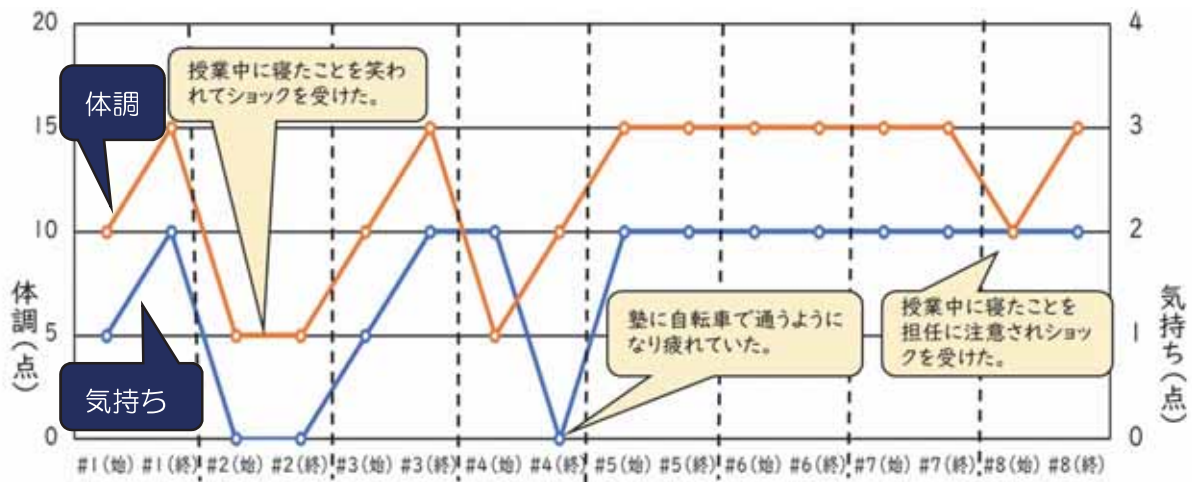


図4 健康チェック（通級開始前、終了後）

## 5. 定期的な遠隔支援会及び保護者面談

### (1) 方法

在籍校及び関係機関との日程調整を行い、遠隔支援会議を行う日程を定めた。遠隔システムのツールとして、学校関係者と会議を行う際には Meet を活用した。通級指導教室の成果については、文章と可視化したグラフや表を用いることで、遠隔でも理解しやすいものを通級指導担当者が用意した。在籍校及び関係機関からは、学校や関係機関での様子や生徒への効果的な指導について報告を受けた。そして、支援会の中で行動面や学習面の変化等の情報の共有を行うことで、指導の方向性を合わせるとともに、指導法の改善を図るようにした（図5）。

遠隔の保護者面談では、連絡帳や電話連絡を通じて日程調整を行い、日程を定めるようにした。遠隔システムのツールとして、保護者は県が管理する Google のクラウドシステムに入ることができないため、保護者と面談を行う際には Zoom を活用した。通級指導教室の成果については、文章と可視化したグラフや表を用いることで、遠隔でも理解しやすいものを通級指導担当者が用意した。保護者は家庭での様子を中心に生徒の変容についての報告を行った。そして、面談の中で行動面等の変化についての情報共有を行い、指導の共有化を図るとともに、手立ての改善を図るようにした（図6）。

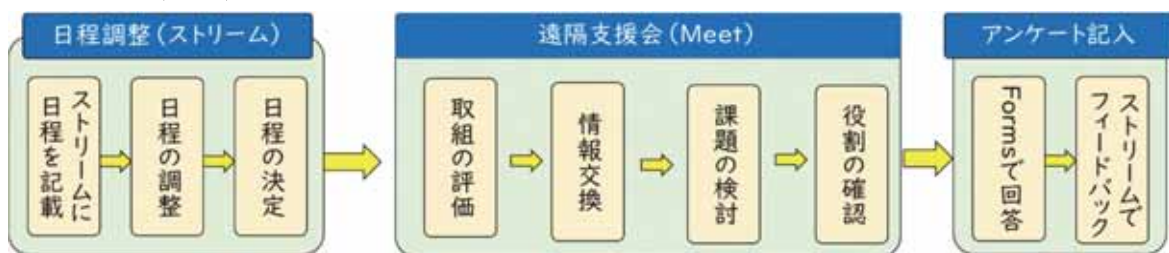


図5 遠隔の支援会の流れ



図6 遠隔の保護者面談の流れ

## (2) 定期的な遠隔支援会及び保護者面談の取組

生徒 A に関する支援会議は5回行った(表7)。A 中学校との遠隔システムを活用した支援会議は、機器の接続は5分以内に行うことができ、お互いの情報を伝えることができた。会議時間は対面のときよりも短縮することができた。会議は特別支援教育コーディネーターが中心となって呼びかけて参加者を募ることができた。初めて支援会議を遠隔で行った際には資料の「文字が見えにくかった」という意見と遠隔での支援会議の効果について「ややそう思う」と評価されたが、2回目の遠隔での支援会議では資料の文字も読め、効果を感じられるものになっていたと評価された(表8)。遠隔システムを活用した支援会議が効果的だと感じた点については、「移動の時間が省ける。」という意見が得られた。改善が必要な点として「直接顔を合わせることも必要。」「遠隔と対面を使い分けることが必要である」と指摘があった。

生徒 B に関する支援会議は、令和3年度は3回、令和4年度は4回行うことができた(表9)。B 中学校との遠隔システムを活用した支援会議は、機器の接続は5分以内にだいたいできていたが、機器の操作に苦手意識をもっている教員が接続に5分以上かかることがあった。会議時間は対面のときよりも短縮することができた。会議は特別支援教育コーディネーターが在籍校の関係者に呼びかけを行うことで担任以外に学年主任や副担任が参加することができた。資料の文字が「小さかったが読めた」という意見以外は内容も理解でき、効果を感じられるものになっていたと評価された。遠隔システムを活用した支援会議が効果的だと感じた点については、「移動の時間が省ける。」「欲しい資料が手元にある。」という意見が得られた。改善が必要な点として「資料の提示などの方法が分からないので勉強が必要。」「オンラインなど苦手意識がある方には苦痛かもしれない。」と指摘があった(表10)。

生徒 B の保護者面談は、対面と遠隔を交互に行うことができた。面談の時間は対面と比較すると遠隔の方が短かった。事前に面談で話す内容について資料を作成し、渡すことでポイントを絞って話すことができた。アンケートでは内容も理解でき、効果を感じられるものになっていたと評価された。保護者が効果的だと感じた点については、「無理のない時間帯に面談を行える。」「時間設定が行いやすくて良かった。」という意見が得られた。改善が必要な点としては、対面でじっくりと話して伝えたいという要望が出された。

表7 A 中学校との支援会

日にち	人数	内訳	接続時間 (分)	会議時間 (分)	形態	内容
4/19	7	通級：担当者2 A中：C o 1、学年主任1 担任1、不登校担当1 関係機関：担当者1	無し	60	対面	・担当者顔合わせ ・4月当初の様子
8/18	3	通級：担当者2 A中：担任1	無し	65	対面	・1学期の様子 ・1学期の評価
10/21	4	通級：担当者2 関係機関：担当者1、主任1	2	34	遠隔	・2学期の様子 ・後期の目標

10/27	4	通級：担当者 2 A 中：担任 1、学年主任 1	5	30	遠隔	・ 2 学期の様子 ・ 後期の目標
12/24	5	通級：担当者 2 A 中：担任 1 関係機関：担当者 1、主任 1	9	19	遠隔	・ 2 学期の様子 ・ 2 学期の評価 ・ 3 学期について

※表中の「Co」は特別支援教育コーディネーター

表8 A 中学校の遠隔システムを活用した支援会議を実施後のアンケート結果

項目		10/21	12/24
機器の準備・会場について	機器の設定は難しかったですか？	簡単だった	簡単だった
	ネット接続までの所要時間は？	5分未満	5分未満
	支援会の参加人数は適切でしたか？	ちょうど良かった	ちょうど良かった
	会議を行った場所はどこですか？	相談室	相談室
	場所は適切でしたか？	適切だった	適切だった
支援会議について	支援会の内容は理解できましたか？	だいたい理解できた	理解できた
	参加者の発言は聞こえましたか？	十分聞こえた	十分聞こえた
	画面共有された資料の文字のサイズは適切でしたか？	文字が見えにくかった	ちょうど良かった
	意見交換は活発でしたか？	活発だった	活発だった
	支援会の時間の長さは適切でしたか？	適切だった	適切だった
評価について	遠隔システムを活用した支援会議は効果的だと思いましたか？	ややそう思う	とてもそう思う
	効果的だと感じた点を挙げてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手軽であり移動時間が短縮できる。時間設定も少し融通が聞くのではと思った。</li> <li>・ 顔を合わせて話すことは大切にしたいと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 顔を見ながら会議ができる。</li> <li>・ 移動時間が短縮できる。</li> </ul>